

イギリス文学にみられるスポーツについて C. Doyle の諸作品を手がかりとして

A study of sport appeared in English literature
— with reference to the works of C. Doyle —

山 田 岳 志^{*} 加 賀 秀 雄^{**}

Takeshi YAMADA, Hideo KAGA

The aim of this study is to make clear the literary image of Athleticism in relation to the social structure from the late nineteenth century to the early twentieth century.

For this paper, the works of C. Doyle from 1887's to 1927's is examined here.

Literary works have been thought to be a useful means of assessing of sports. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. To explain sports through literature seems to be most suitable approach.

From this point of view, the image of Athleticism appeared in English literature from the late nineteenth century to the early twentieth century discussed in this paper, mainly concerning between the British Empire and boxing treated in the works of C. Doyle.

I. はじめに

本稿の目的は19世紀末のイギリス社会において新しい文学傾向となってくる推理・冒險小説を大衆文化の重要な側面として捉え、そこからみられるヘゲモニー装置としてのアスレティシズムがどのようなものとして描かれているのか、具体的には19世紀末から20世紀初期にかけて近代スポーツとして合理化されたボクシング⁶⁶⁾と帝国主義的精神との関りについて、C. Doyleの諸作品を拠り所としてテーマへのアプローチを試みる。

19世紀半ばのイギリス社会を退化と退廃と見たてていたC. キングズレーやT. ヒューズに代表される筋肉的キリスト教の思想的展開はパブリックスクールにアスレティシズムという固

有のモラルとイデオロギーを成立させる契機をもたらした。しかし、マンガンも指摘するように「理想主義と詭弁、さらには便宜主義までも内包した」ような複雑⁶³⁾な側面をもっていたアスレティシズムの性格は特殊イギリス的事情を反映するかたちで形成されてきた。

村岡が指摘するように、⁶⁷⁾アスレティシズムという教育イデオロギーによってパブリックスクールで養成されてくる騎士道的ジェントルマン像は、対内的には身体的弱体化と道徳的低下、さらにはジェントルマンの文化的身分制の問題、対外的にはクリミア戦争からボーア戦争にかけての帝国主義的気運のなかにあって中産階級を中心とする義勇軍運動という社会的意識に支えられていた。

つまり、ホブソンが指摘するようにアスレ

^{*}愛知工業大学

^{**}名古屋大学総合保健体育科学センター

^{*} Aichi Institute of Technology

^{**} Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

ティシズムは「男性的キリスト教から帝国的キリスト教」⁵⁶⁾にいたる過程で、植民地官僚としての騎士道的ジェントルマンを支える教育イデオロギーとして発展していったのである。こうして帝国支配としての礎石となっていくアスレティシズムにとって「政治的機関という大衆的教育」⁵⁷⁾としての性格をもつ文学作品は、それに奉仕するかたちで道徳的武装と帝国主義を支えるイデオロギーとして設備されていく。キブリング、ハガード⁷⁴⁾等の文学活動は帝国主義的気運と連動するかたちで作品の中に騎士道精神やスポーツを格好のテーマとしてとりあげていった。本研究ではT.ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』がパブリックスクールという教育制度の内を舞台としてアスレティシズムを若いジェントルマンの行動規範として機能させようとしたのであれば、19世紀末から20世紀初期イギリス社会でアスレティシズムを帝国主義の思想的支柱として機能させようとしたC. Doyleの諸作品をとりあげて、特にボクシングに対するC. Doyleの姿勢と帝国主義との関りについて検討していく。そのために①C. Doyleのスポーツ知識、②C. Doyleのスポーツ体験、③ボクシングと帝国主義、そしてこれらを統合するかたちで④C. Doyleのスポーツ観を概観しながらC. Doyleの文学作品にみられるアスレティシズムの意義を明らかにしたいと考えている。使用する資料はホームズ物語、歴史小説(Rodney Stone)とC. Doyleの自伝であるが、特に今回は“Rodney Stone”についてはボクシングに関する補助的な資料にとどめた。なお本研究はイギリス文学作品にみられるスポーツ像の問題を設定するための大雑把な予備的試みでもある。

I. C. Doyle を囲むスポーツ状況

— C. Doyle のスポーツ知識との係りで —

帝国主義的要素を内包するホームズ物語やC. Doyleが強い愛着をもって書いたと言われる歴史小説の内で描かれたスポーツ風俗はスポーツ史研究にとっても貴重な資料を提供してい

る。C. Doyle自身「スポーツは私の生涯にかなり大きな役割を果したし、喜びも与えた。²⁾」と述べるように、パブリックスクール(ストニーハースト校)時代からスポーツマンとして活躍し、40歳代になって「筋肉づくりをするために例の強い人ザンドウ氏の指導」³⁾を受けたり、またザンドウ氏の指導の下で自らが『お手本を示し、力と筋肉』のコンテストを開催するなど身体に対する关心も非常に高いものであった。またC. Doyleとボクシングとの関係を如実に示してくれる“Rodney Stone”におけるボクシングについては知識以上に優れた体験者であった。このようにC. Doyleのスポーツ愛好化傾向はイギリス帝国の存在という社会的・歴史的状況からみて、アスレティシズムの洗礼を受けながら時代を生きた証しでもあったと思われる。

ここではC. Doyleの社会観、スポーツ観とも関連してくると考えられる彼のスポーツ知識について考えていく。「わたしはイギリスで捕虜になっていたとき、どんなスポーツが一般にゆきわたっていたか、どんな人々の精神と生活にスポーツが浸みこんでいるか——これをつぶさに知って驚いたものだ。走る馬、ケンカする鶏、鼠を噛み殺す犬、殴る人間人々はここに挙げたものなら、このどれを見るためにも栄光に輝く皇帝陛下のもとすら去っていくだろう。」⁴⁾、C. Doyle“が歴史小説を考えている間に、気ばらしに書いたと言わるのがこの“ジェラール物語”であった。この作品についてC. Doyleは「この本はナポレオン時代の詳細な調査で満ちており、従って私の軍事的描写はきわめて正確にできていると思う。」⁵⁾と述べているが、ナポレオン軍のマルボ将軍をモデルとして書いたと言われるこの歴史小説はそのまま18世紀末から19世紀半ばにかけてのイギリス社会の描写でもあったと考えられる。「わたしはこのイギリス的スポーツ精神を彼らから学びとったのだ。賭の形になるものなら、わが配下の軽騎兵を彼の手下の竜騎兵に対して賭けたことだろう。」⁶⁾、スポーツ史上この時代のイギリス社会において闘鶏、競馬、闘犬、熊掛け、プライズ・ファイトなどの伝統的なブラッディスポー

ツは19世紀半ばに『合理的娯楽運動』が展開されてくるまで、パトロン・スポーツとして盛大に行われていた⁷⁵⁾。C. Doyleの歴史小説が史実を基本とする姿勢で貫かれているところに資料的価値を見出だすとすれば、この作品におけるスポーツ風俗の描写はスポーツ史研究にとって価値があると考えられる。「私が向い合つてすわった紳士は体格のがっしりとした、色つやのいい青年で、率直誠実な顔をし、ちぢれた黄色いちょびひげをはやしていた。ひじょうによく光るシルクハットをかぶり、趣味のいい渋い黒の服をきた格好は——りゅうとした若手の実業家で、生粋のロンドンっ子と呼ばれる階級、つまり精銳の義勇兵連隊を国にささげ、多くの競技選手、運動家を生み出す点はこの国のいかなる集団にもまさるある階級の出身であることを表していた。」⁷⁷⁾、この作品中、事件の依頼主（ホール・パイクロフト）が19世紀半ばからイギリス社会のあらゆる分野でヘゲモニーを掌握していく中産階級出身の若手実業家であることは当然であろう。であればこの若い実業家はパブリックスクール出身であり、そこで充分にアスレティシズムの洗礼を受けたスポーツマンでもあった。ましてこの階級が進んで帝国主義精神の持ち主であったことを思えば、義勇兵としての軍隊経験は当然であったと考えられる。C. Doyleはパブリックスクールの実体は勿論、彼らの進路に対しても十分な知識を持っていたのである。そしてパブリックスクールからオックス・ブリッジに至る過程でのアスレティシズムについての描写も、C. Doyleのスポーツに対する豊かな知識を披露する結果となっている。

「二階にいるのはギルクリストと申しまして学科もよくできるスポーツマンですが、ラグビーとクリケットではこの学校の選手で、ハードルと幅とびでは大学から対抗試合の選手に指名されています。頭もよいし男らしい青年です。」⁸³⁾、この作品の舞台は1895年である。事件の依頼主がホームズに友人（ギルクリスト）を紹介する場面はC. Doyleのスポーツ知識が十分に生かされたかたちでスポーツ風俗の描写になっている。事実、クリケットは1827年から、ラグビー

は1872年から、陸上競技は1864年からオックスフォードとケンブリッジの対抗戦が開始されているのである⁸⁰⁾。また幅とびに用いる運動用具についての知識はC. Doyleが当時のスポーツにいかに精通していたかの証明でもあつた⁹¹⁾。さらに『スリー・クォーターの失踪』におけるスポーツ風俗の描写こそは、C. Doyleが19世紀末のアスレティシズムの状況についていかに豊かな知識の持ち主であったかを明示してくれる。この作品中、事件の依頼主と失踪した（ゴドリー）はケンブリッジ大学のスポーツマンである。そして大学におけるラグビーの詳細な描写もさることながら、この時代のスポーツマンがいかに英雄像としてのスポーツマンであったかもこの作品は教示してくれる。「僕のチームじゃゴドリーさえスリー・クォーターにいてくれたらあとは二人くらい抜けたって大丈夫だとさえ思っているんです。パスでもタックルでもドリブルでもかなうものはいないし、それに頭がいいからチームをしっかりとまとめてくれるんです。——そりゃ第一補欠のムアハウスがいますけど、これはハーフとして練習してきたんだしスクラムにくついて飛びこんでゆくのは得意ですけど、タッチラインに沿ってはなれて動けというのは無理なんです。それにブレース・キックはあざやかだけれども、スプリントがさっぱり利きませんからね。モートンだのジョンソンだのオックスフォードの駿足にかかったら子供あついですよ。きっと。ステイブンソンなら脚だけは早いけれど、判断はわるいし、25ヤード・ラインからのドロップキックができるときているんです。パントなりドロップキックなりのできないスリー・クォーターなんておよそ意味ないですよ。」¹⁰⁾、ここでのラグビーの技術的な描写は勿論のこと、それ以上に近代スポーツの資質としての統率力、判断力、役割分担（チーム・ワーク）は19世紀末のイギリス社会がスポーツに求めた社会的資質でもあった。「おどろきましたね。私はウェールズとの対抗試合に第一補欠で出たんですよ。それにこの1年大学チームの主将もつとめてきました。——ゴドリー・ストーン

を知らない人がこの国に一人でもいようとは夢にも思いませんでしたよ。ケンブリッジだけじゃなくブラックヒースや国際試合に5回も出た精銳の名スリー・クォーターなんですからね。おどろいたなあ、ホームズさんこれまでどこに住んでいらしたのですか。」¹¹⁾、C. Doyle がホームズ物語を書き出したのが1886年であった。イギリスでラグビーが近代スポーツとして最初の国際試合を行ったのが1870年にイングランド対スコットランドであった。C. Doyle のこの作品が発表される以前の国際試合を体験した（ゴドリー・ストートン）であれば、まさにそれは時代の英雄像として写ったのである。この英雄像としてのスポーツマンの存在すら知らなかったホームズは事件の依頼主にイギリス人として当然の知識すら持ち合わせていないことを批判されるが、こうした C. Doyle の描写の背景には C. Doyle こそスポーツマンを時代的英雄像として描きたかった意図が込められていたと考えられる。この場面は19世紀末のイギリス社会の求めているものがカーライル的英雄像からスポーツマンとしての英雄像への転換期であったことを教示してくれる⁸¹⁾。この《スリー・クォーターの失踪》こそは、C. Doyle が近代スポーツとしてのラグビーの知識を示してくれた作品であり、スポーツ史的にも価値のある作品の一つであると考えられる。

さて、C. Doyle の作品にみられるラグビーに関する描写は、アスレティシズムと階級との結びつきを明示してくれる。「有名な運動家の家柄でもあり、自身ラグビーの名フォワードだったが、とにかくプレーが狂暴になる癖があるので敬遠されがちだった。技は国際級だった。弟もジャッジによってバラの刺しゅうの英国ジャージーをつける資格ある名フォワードと見なされていた。」¹²⁾、「記事の終りにこうある。——『ライトブルーの敗北は国際級の名手ゴドリー・ストートンの欠場が主因で、試合の進行中もしばしば痛感された。スリー・クォーターラインに団結は欠けているし、攻防とも弱体で、ためにチーム全体の懸命な努力も及ばなかつた。』¹³⁾、ラグビー選手のジャージーは元来が

騎士道的起源をもつと言われているが、スポーツにジャージーが採用されるようになるのは19世紀半ば頃からであり、『トム・ブラウンの学校生活』におけるラグビー試合ではまだ採用されていなかった⁶⁸⁾。アスレティシズムにみられるカラーのシステムに象徴されるスポーツの世界の階級性は、そのまま社会の階級構造でもあった⁶⁴⁾。このように C. Doyle がスポーツマンにとってジャージーのもつ意義にまで言及したことは、彼のスポーツ知識が単に技術だけにとどまるものではなかった、と言うことを明示してくれる。

さて、C. Doyle のスポーツに対する知識で特筆されるべきはボクシングについてである。「健康をもとめてここ数年間の私は文学的著作に関してはほとんど語らないできたが、この時期の主な作品である『亡命者』は、摂政時代の研究に伊達男と懸賞拳闘士を配して書いたものである。私は元来古い懸賞拳闘士のことはあまり知らないし、懸賞拳闘リングの知識もあまりない。」¹⁴⁾、このように述べる C. Doyle であるが、彼の作品中舞台を摂政時代にとった歴史小説でボクシング小説と言われる “Rodney Stone” がある。この作品で C. Doyle は摂政時代のシンボルとしてのダンディ像を超えて英雄像に係るボクシング論を展開していく。

He was a type and leader of a strange breed of men which has vanished away from England — the full — blooded, virile buck, exquisite in his dress, narrow in his thoughts, coarse in his amusements, and eccentric in his habit. They walk across the bright stage of English history with their finicky step, their preposterous cravats, their high collars, thier dangling seals, and they vanish into those dark wings which there is no return. The world has outgrown them, and there is no place now for their strange fashions, their practical jokes, and carefully cultivated eccentricities. And yet behind this outer veiling of folly, with which they so carefully draped themselves, they were often

men of strong character and robust personality.¹⁵⁾

この“Rodney Stone”で採用されていくのが、1814年の拳闘クラブのルールである。摂政時代はボクシングの黄金時代でもあった。「まあ危険な男という評判ではあるね。騎手としてはイングランドきっての命知らずだろう。2、3年前グランド・ナショナルで2着にはいったはずだ。いってみれば遅く生まれすぎた男なんだな。摂政時代にでも生まれていれば一代の伊達男で通っただろう。ボクサーであり、運動家であり、競馬では向こう知らずの賭博師——」¹⁶⁾、摂政時代のジェントルマンと言えば狩猟家として、競馬馬の馬主として、アマチュアのボクサーとして、さらには血気さかんな伊達男という資質が条件であった。⁷⁶⁾。このように19世紀初期のジェントルマン像にはダンディな側面があったが、しかし強い性格としてのジェントルマン像もあった。⁸²⁾ C. Doyle はこうしたジェントルマンの性格を見事に描写している。「ラフトン公の邸宅には夕方になるとスポーツの爱好者がたくさん集まつたものだ。ここではブドウ酒を大いに飲み、賭に熱中し、狩馬や狐のことなどが話題になった。こういう風変りな連中を今でも何とよく忘れずに覚えていることか——この連中はいわば同じ穴のムジナであつて、酒飲みで、無鉄砲で、ケンカ早く、賭博師で——とてつもないむら気の持ち主であった。」^{17, 18)}、こうした場面、つまりジェラール准将が見た光景こそ19世紀初期ジェントルマンの生活習慣でもあったと考えられる。

さて、C. Doyle のスポーツに対する知識の概観を試みた。それは19世紀初期から20世紀初期にかけての下層階級から上流階級までのスポーツ状況であった。このことは C. Doyle のスポーツに対する知識が階級に偏しない幅広い豊富なものであったことを物語るものであった。特に歴史小説との係りでボクシングに対する知識は C. Doyle の社会観、スポーツ観を確立していくための重要な要素になっていく。

II. C. Doyle とアスレティシズム

— C. Doyle のスポーツ体験との係りで —

C. Doyle が公人としてボア戦争に出かけたり、あるいは文学作家としてまた歴史小説家として活躍した時代は、アスレティシズムがゲーム崇拜にむかって帝国主義的精神を支えるイデオロギーの一部となり、イギリス社会により明確な目的志向性を与える役割りを与えられた時期でもあった⁶⁹⁾。こうした社会的状況を背負つて C. Doyle はスポーツ（特にボクシング）を国防との係りで捉えていく。さて、「スポーツは人間のするものであって、馬のするものではない。」¹⁹⁾と述べるように、C. Doyle にとってスポーツとはするスポーツであって観るスポーツではなかった。こうした C. Doyle のスポーツに対する姿勢から「私は一つのものに専心しなかつたから何でも二流どころにすぎない。万能選手をもって任じていたし、それによってこそスポーツの楽しみを何人にも劣らず味わってきたと思っている。」²⁰⁾、こう述べる C. Doyle が体験したスポーツは、ラグビー、クリケット、ボクシング、ゴルフ、ビリヤード、フェンシング、サッカー、狩猟、自動車、乗馬と多種多様であった。しかも「人は年をとるにつれて、自分のスポーツ歴は終ったと思いがちである。それでも私はできるかぎりそれと縁を切ろうとせずやってきた。」²¹⁾、というように、C. Doyle のスポーツ歴はパブリックスクール時代をスタートに、44歳でア式フットボール試合に出場したり、クリケットは54歳までと言うようにスポーツマンで通してきた。ここではこうした C. Doyle のスポーツ体験の内からいくつかを挙げて彼自身のスポーツに対する姿勢について考えていく。

C. Doyle は競馬を真のスポーツとは認めなかつた。その理由の一つが競馬のもつ性格である。つまり人間の意志とは無縁の要素が支配するマージナル的性格が、合理化される以前のボクシングと同じでありスポーツとしての競馬であれば、近代化され純化されたものでなければならぬと考えていた。。もう一つは群衆とし

ての問題である。競馬に群がる大衆の集団化、暴徒化、飲酒等は道徳的退廃をまねき、常に日常の社会秩序を脅かす根源であると考えていた。であれば C. Doyle は「国民的見地からみても競馬は害のほうがはるかに大きい」²²⁾ スポーツと考えていた。

さて、「独りでやる立派なスポーツがボクシングだとすれば、集団でやるものではラグビーが第一だと思う」²³⁾と述べる C. Doyle は、ラグビーで養成される「力、勇気、スピード、才略」²⁴⁾という資質を時代的・精神との係りでとらえようとした。C. Doyle 自身も体験したラグビーであれば、当時のラグビー状況にも精通しており、体力を要求されるラグビーであればこそ、イートン校式フットボールにみられるような体力的に消耗度の高いスポーツの改善を提案している。

クリケットはどうであろうか。「クリケットについての私の最初の思い出は愉快なものではない。私立予備校でまだごく小さな生徒だったころの私は、まわりに立ってうらやましげに見物する連中の一人だったが、ある時有名な若い選手のプレイを見ていると、その選手の強打した球が私の膝頭にあたった。そして、その選手の評判の腕に抱かれて学校の診療所へ運ばれたのである。」²⁵⁾、C. Doyle とクリケットの出会いは偶発的な出来事ではあったが、このきっかけは C. Doyle をクリケットに熱中にさせプロ級の腕前を披露するまでになっていく。しかもここで C. Doyle が言うように、クリケットに限らずスポーツマンが時代的英雄像として描かれているのである。このクリケットに対する C. Doyle の姿勢は「クリケットという競技があり——これは勇ましい娯楽で、軍人向きの競技だ。競技者は銘々相手にボールを当てようとする。このボールを受けとるのに使うのは小さな打棒だ——まったくの話、これは子供の遊びではない。」²⁶⁾と述べるように、明らかにアスレティシズムとしてのクリケットを称賛しているのである。C. Doyle が活躍した 19 世紀末から 20 世紀初期にかけて、帝国主義的風潮と呼応しながら発展してくるアスレティシズム、それは C. Doyle が称賛するラグビー・クリ

ケットの試合をつうじて習得される資質であり、帝国主義的国家を支える教育イデオロギーでもあった。

C. Doyle が 1914 年、国立保養地区の視察をかねてアメリカ各地を巡回した時、野球について触れている。C. Doyle は野球をクリケットと比較しながら感想を述べているが²⁷⁾、同時に野球とサッカーの類似点について述べている。それはどちらもプロスポーツという側面からチームの経済力が勝負を左右するであろうということ、また野球やサッカーのようにプレイする土地を代表するものではないこと、この両面を有する野球はスポーツを帝国主義的精神の支えと考えていた C. Doyle からは支持されていない。

さて、C. Doyle はスポーツ万能であり、公人としてはオリンピックの組織委員としての係りも持ったスポーツマンであった。こうした体験をもつ C. Doyle はスポーツに対して次のようなことを期待していた。「与えそして取ること、勝利を謙譲の気持で受けとり敗北をいさぎよく認めること、不利とも戦うこと、自分の信念を捨てないこと、敵に対して信頼を持ち、味方を正しく判断すること——こうしたことは眞のスポーツが与えてくれる教訓の幾つかである。」²⁸⁾

III. C. Doyle と帝国主義

—退化と退廃との係りで—

19 世紀末のミュージック・ホールが大英帝国を支えるジンゴイズムのメディアとしての側面をもつとすれば、サバタリアン・ムーブメントの俗化は大衆スポーツへの道を切り開いていく契機になった。²⁹⁾ こうして大衆文化としてのミュージック・ホール、大衆スポーツ、そしてパブリックスクールにおけるアスレティシズムは 1897 年のダイヤモンド・ジュビリーにおいて大英帝国の一体性を鼓舞するものとして機能していった。C. Doyle 自身も「あの方でも国民の思想はきわめて軍事的であった。」²⁹⁾と述べているように、ミュージック・ホールでのジンゴ・ソングやパンチ誌等によって帝国主義的

社会を感知していたと考えられる。そして C. Doyle はこうした社会状況のなかから歴史小説、冒險・推理小説を通して時代精神を擁護していくのである。しかも C. Doyle が「私たちは愛国的群衆であり、小さな体には愛国的精神の血潮が流れていた。」³⁰⁾と述べているように、パブリックスクール時代から感覚的にも愛国的精神がアスレティシズムを通して形成されたと考えられる。ここでは C. Doyle が体験したボア戦争から第一次世界大戦にかけてのイギリス社会と、C. Doyle にとってこの両戦争がどんな意味をもっていたのかを考えてみる。

さて、「イギリス帝国の健康を保持したいと思ったらまず手にしなければならないのは、ワイングラスではなくて小銃なのである。」³¹⁾と述べる C. Doyle は自らボア戦争への志願兵として、40歳という年令で応募したがすぐに採用されず、結果的には友人、ジョン・ラングマンが計画した野戦病院の補助的医員兼総監督という立場で南アフリカへ渡ることになる。このボア戦争における思考・行動が C. Doyle の戦争に対する姿勢であったと言われる。このボア戦争の起りは、イギリスの植民地帝国主義的動機によるものであったが戦争もスポーツ感覚で捉えた C. Doyle の行動原理は、ジンゴイズムの風潮と同調して帝国主義を支えたのである。しかし、ボア戦争はイギリスの国際的孤立化を招くと同時に、国内的には新たな社会問題、つまり階級的矛盾をさらけ出すことになっていた。それは労働者階級の子弟の道徳的退廃から生じた身体の弱体化という問題であった。「ボア戦争時は、それまでしばしば社会主義者たちが強調してきた人民大衆の身体の健康状態の悪さが、一般的の認めるところとなってきた。1893年から1910年の間の医学的検査を受けた70万人の新兵の3分の1以上が軍務に服するのに適しないと判断されたが、徴兵検査官は、もっと多くの若者が検査そのものさえ受けける身体条件を具えていないとして、兵役から除外する者の割合を60%という高さにした。」³²⁾、こうした認識はイギリスの学校教育に大きな影響を与えていった。伝統的にイギリ

スは志願兵、義勇軍制度によって国防が支えられていたが、マンチェスターをはじめ工業地域での大量の徴兵不合格者が公表されると、貧困と保健状態の悪化の問題はイギリス国民の身体的退化現象に注意を向けさせるようになった⁷⁷⁾。また、国民の身体的退化を道徳的退廃と結びつける傾向にあって『男らしいクリスチャン』という理想や、人格の形成のためのスポーツという観念がパブリックスクールから公立学校に移植され、規律や勇気や忠誠心などといった徳目の育成をめざして、勝ち負けを重視する集団競技が急速に普及はじめた。帝国主義の浸透は、ときとしてあからさまに軍事的な形態をとる。高学児童を対象とするライフル射撃クラブや学生軍事教練団などの設置が、その一例である。⁷⁸⁾、こうしてイギリスにおける学校教育は、身体的向上という側面を強調しながら、ホブソンが指摘するように「愛国心を装う帝国主義のための学校制度」が展開されていく。^{58, 79)} C. Doyle の作品には直接帝国主義と教育について言及しているところはない。しかし彼の自伝の中で国会議員に立候補した理由をボクシングの用語を駆使しながら、マージナルなスポーツに参加しながら、「このボア戦争に負けたら国家的恥辱であるばかりか、帝国の存亡にも関することになりかねない。」³²⁾、このように選挙民に訴えることが C. Doyle の立候補の真意であり、彼の社会観でもあった。そして国家防衛、帝國存続の必要性を説いていく。まさに C. Doyle の社会観は帝国主義的社会を支える精神であったと考えられる。こうして、帝国主義的精神の持ち主として C. Doyle はボア戦争後も彼独自の国防改革論を展開していく。「最善をつくそうとする時のイギリス士官はすばらしい。みな公立学校出なのだ。」³³⁾、「それまでは私はわが軍の兵士たちの生命が、ひいてはイギリスそのものが陸軍の保守主義のために危険にさらされる実相をみてきたし、新しい軍事的見解が生まれぬ限り将来も同じ危険が起るものと固く信じていた。」³⁴⁾、「悲しいことにイギリスの官僚気質はひどく堅い團結力をもち、彼らを攻撃しなければならない時、相手

から正義や公平は期待できない。むしろそれは互いの不利を暴路せぬよう誓いあい、国民の利益よりも誤った忠誠觀を大切にする強固な組合なのだ。」³⁵⁾

C. Doyle のこうした批判は、階級社会の構造をそのまま反映している軍事的機構に対する批判であった。大英帝国の存在を肯定する C. Doyle は近代戦争における兵器の改良とともに、国民の総力戦としての可能性をも示唆した提案をしていくのである。³⁶⁾ このように、C. Doyle はホブソンが指摘するような帝国の存在を侵略行為とみるよりも大英帝国を肯定する社会觀を打ち立てていく。ホブソンが「19世紀を通じてイギリスの秩序と発展を確保したものは、普通の市民的並に産業的な徳の涵養及び実践であり、それを天然資源並に歴史的偶然性の利点が助けたのである。我々はこれの代りに軍隊の道徳律を置き替えようとするのだろうか。それとも、一つは良き市民の発達を促進し他は良き兵士の発達を促進するという二つの相容れない主義の絶えざる衝突によって、国民の精神に行動を迷わそうとするのだろうか。」³⁹⁾ と述べる前に、繁栄と榮光という「イギリス帝国というものが存続するかぎり、私の生活に事欠くことはない。」³⁶⁾ と述べる C. Doyle にとって「わが国のはりっぱなボーイ・スカウト運動や、予備軍を形成している退役兵たちの運動のことをはなした。『老いも若きもが新しく、犠牲的な愛国心に富む運動を行える国こそ生きたる国です。』」³⁷⁾、C. Doyle にとって帝国主義的精神を支えはスポーツであった。

IV. C. Doyle のスポーツ觀 —ボクシングと帝国主義的精神との係りで—

「シャーロック・ホームズは、運動のための運動はあまりしない男だった。彼ほど筋肉運動のできる人は少なかったし、ある重量の級では、私の見たこともないすぐれた拳闘家手の一人であることは疑いもなかった。ところが目的のない肉体運動は精力の浪費として何か職業上の目的でもないかぎりは、からだを動かすこととは

あまりしなかった。」³⁸⁾、C. Doyle の自伝のよれば、「元来がものごとに熱中する性質だから面白いものであれば、何でものがさなかつたし、享樂については人後におちなかつた。——ゲームごともできることは何でもやつた。」³⁹⁾ と言うように、C. Doyle は若い時からあらゆるスポーツを体験したスポーツマンであった。こうした彼がボクシングにこだわるのはどんな理由があったか、ここでは C. Doyle のボクシングに対する知識、体験、それに歴史認識を通して彼のスポーツ觀について考えてみる。

「私はボクシングというイギリス古来のすぐれたスポーツにはずっと興味をもちつづけ、自分ではどのクラスに属するとはいわぬが、フォームの点ではアマチュアとしてかなりのものだといってよいと思う。教えるよりも習うことをもつてていたら、私はかなり強くなっていたと思うが、初めの練習期間のほかは私にはプロ選手に教わる機会がないままになった。」⁴⁰⁾ と述べる C. Doyle のボクシングに対する知識、体験は特筆されるものである。それに C. Doyle のボクシングに対する姿勢はイデオロギーとしてのボクシングであったと考えられる。C. Doyle のボクシングについての知識は、“Rodney Stone”を書くにあたって懸賞ボクシングに関する知識をピアス・イーガンの『ボクシアナ』や、ヘンリー・ダウンズ・マイルズの『ピュージリストイカ』から求めていた、と言われている⁶⁰⁾。

C. Doyle はボクシング小説を書く時、ボクシングの正確な歴史を把握してから臨んだのである⁴¹⁾。そしてボクシング小説、“Rodney Stone”におけるボクシングに対する C. Doyle の姿勢、それこそ彼のスポーツ觀であった。この “Rodney Stone” では摂政時代が設定される。この時代の特徴は、モラルの低下、華美志向、ダンディの時代と言われ摂政時代のジェントルマン像と言えば、「ボクサー、スポーツマン、賭けの花形」としてのダンディ像であった。しかし、C. Doyle は時代の負性としてのダンディ像をボクシングを通して英雄像へと転化させていく。その過程でボクシングは C. Doyle にとってイデ

オロギーとなっていく。では C. Doyle はなぜ摂政時代のボクシングを強調していくのか。19世紀初期はボクシングにとって黄金時代であったと言われる。ジェイムズ・フッグによる拳闘術、剣術、棒術を教える学校の設立は、やがてピュージリストと称される職業拳闘家を生みだすようになり、やがてはパトロン・スポーツとして発展していった、と言われている⁷¹⁾。そして、C. Doyle にとっても、「旧式の懸賞ボクシングが国民的見地からみてりっぱなものであったという私の意見は隠しもせぬが、それはグローブを使用する新しいボクシングが現代においてそうであるのとまったく同じである」⁴¹⁾と述べるように、C. Doyle がボクシングについて語るとき、それは懸賞ボクシングであった。しかし、スポーツ史研究が教示してくれるようには懸賞ボクシングは blood Sport として批判されてきたものであるが、しかしパトロン・スポーツには家父長主義社会を支える社会的装置としての側面もあった。⁷²⁾こうしたパトロン・スポーツのもつ性格が 1814 年にはロンドンに The Pugilistic Club が結成されるなどして、懸賞ボクシングは盛況をきわめたのである。確かにジャック・ブロートンによる《ブロートンズ・コード》と呼ばれるルールが設けられたとは言え、懸賞ボクシングには賭博性が非常に強かった。そのために不正、八百長試合が仕組まれることもあった。C. Doyle はボクシングの知識として 19 世紀初期の社会状況も十分把握していたと考えられる。“ジェラール物”と言われる彼の作品の中にもこうした状況を描写しているところが散在するのである。

「何をかくそう、このわたしはブリッスルのバスラー、ライト級の拳闘選手。この下に見える所はわたしの練習場」⁴²⁾、このバスラーの相手になるのがジェラール准将で、このフランス人にとってバスラーが、片腕を突き出し、もう一つの腕を胸に当てながらとする姿勢は、あまり見かけないものであった。話しをもどすと、バスラーはジェラール准将から膝にキズを負わされるが、この時バスラーのトレーナーが、「この膝が今度の水曜日までによくなつていねえ

と、あんたは八百長をやつたってことに受けとられ、今後賭け主を探すのは、なかなか面倒な仕事になるぜ」⁴³⁾

「19 勝を今までにあげているが、誰からも八百長のヤの字も耳にはいったことはないなー」⁴⁴⁾

「ラフト公だけでも 54 ポンドあんたにかけること知らないのかね。水曜日の試合に出れば、5 万人分の錢をひっさげてリングにあがることになるんだぜ。」⁴⁵⁾

「拳闘の競技規定、厳格に懸賞拳闘試合の規則に従って奴は戦うと思ってたんだがね。」⁴⁶⁾

C. Doyle のボクシングに対する知識は正確に 19 世紀初期のボクシング史を準っているのである。さて、パトロン・スポーツとしての懸賞ボクシングは伊達男のジェントルマンによって支えられていたが、これは元来流血を覚悟で素手で闘う荒々しいスポーツであった。C. Doyle は「古い時代の荒っぽい様相を活写するものとして」⁴⁷⁾スポーツとしてのボクシングを称賛するが、その目的は何であったか。

それは blood Sport がもつ、もう一つの側面つまりボクシングを「男らしさ、勇気、忍耐」といった伝統的価値を支えるイギリス的スポーツと見ていたからである。⁷³⁾「わが国のスポーツは優柔になるキケンをさけるために、常にやや荒っぽいもののほうがよい」⁴⁸⁾と述べるように C. Doyle はボクシングこそイギリスの伝統的価値観を支える道具とみていた。彼のボクシング小説、“Rodney Stone” もこうした観点からの指摘であったと考えられる。

for good or evil, the love of the ring was confined to no class, but was a national peculiarity deeply seated in the English nature, and a common heritage of the young aristocrat in his drag and of the rough costers sitting six deep in their pony cart.⁴⁹⁾

The ale-drinking, the rude good-fellowship, the heartiness, the laughter at discomforts, the craving to see the fight — all these may be

set down as vulgar and trivial by those to whom they are distasteful ; but to me, listening to the far-off and uncertain echoes of distant past, they seem to have been the very bones upon which much that is most solid and virile in this ancient race was moulded.⁵⁰⁾

さて、C. Doyle のボクシングへの傾注は時代的条件とも関係していたと考えられる。「第一次世界大戦後に世人は、ボクシングの復こうに努力した私たちの成果がどんなものであるかを、はっきりと見てとったに違いない——なぜかというとこの危機において——歴史の将来を決定する時にあたって——ボクシングが大きな役割を果たしたからである。」⁵¹⁾と述べる C. Doyle のボクシングへの賛美は帝国主義的精神と結びついていく。「ボクシングは兵士たちに敢闘精神と積極的な行動力を与え」⁵²⁾るものであった。イギリス社会がボーア戦争から第一次世界大戦へと、その帝国主義的気運を高めていく過程で、C. Doyle はまさしく時代擁護者としての立場を貫ぬいていく。ホブソンが指摘するように「一般大衆のためには、英雄崇拜と人目をそばだてるような栄誉、冒險と競技精神に対するヨリ粗野な訴え、即ち闘争本能を直接的に刺戟するために粗野なけばけばしい色彩で変造された現代史がある。」⁶¹⁾

それとは反対に愛国的精神を支えるアスレティシズムとしてのボクシングは男性的キリスト教徒を帝国的キリスト教徒へと橋渡していく奉仕としての設備であった。ボクシングが近代スポーツとして合理化されてくる過程でスパarringは、アスレティシズムとしてのボクシングを形成していくようになる。

Modern boxing, or more properly speaking sparring, which means only the use of the gloves, has been saved from falling into the same disrepute as partly pugilism, by the innate love of the healthy-mind Britisher for it and partly by the efforts of a few amateur club.⁵⁵⁾

さて、「一フランス人がそのクラスで最高のボクサーになったことは、国民全体の肉体的自信を高めた。それが一人一人に染みわたった。」⁵³⁾、C. Doyle にとって、ボクシングによって養成される果敢な精神、フェアなプレーこそは帝国主義を支える精神的条件であった。ホブソンが攻撃的な帝国主義の原動力とみなしていた闘争と支配という原始的欲望は、大衆向けには英雄崇拜、それを支えるスポーツ精神によって支持されてくる。C. Doyle はまさしくボクシングと愛国精神を結びつけたのである。

おわりに

イギリス・スポーツ史が教示してくれるところによれば、ピュージリスティカとしての性格をもつボクシングが大きく改革されてくるのが摂政時代と言われる 19 世紀初期であった。イングランドにおける懸賞拳闘試合の初代チャンピオンのフィグは、ボクシングを“高貴なもの防衛術”として伊達男達の若いジェントルマンの師範となってボクシングを形式化し、又、フィグの弟子プロートンは 1743 年にボクシング史上ではじめてルールの明文化をはかるとともに、1747 年《マフラーズ》と称するグローブを導入した。これらの主たる目的は、上流階級の子弟の自己防衛の技芸としてであった、と言われる⁶²⁾。こうしたボクシングの社会的状況をジャクソンによって手ほどきを受けたバイロンは次のように記している。

Thursday, 17 March 1814

I have been sparrring with Jackson for exercise this morning; and mean to continue and renew my acquaintance with the muffles. My Chest, and arms, and wind are in very good plight, and I am not in flesh. I used to be a hard hitter, and my arms are very long for my height (5 feet 8-inches). At any rate, exercise is good, and this the severest of all; fencing and the broad-sword never fatigued me half so much.⁶⁵⁾

このように攝政時代はパトロン・スポーツとしてのボクシングが盛んになってくるが、C. Doyle にしてもこの時代のボクシングに関する描写は得意である。「ねえ、ラフトン公《拳》をはじめたら怪我はしないですよ。——《拳》とはどんなものかわたしはわからなかった。ところがまもなく大きな皮のかたまり——フェンシング用のグローブに似てないでもないが、それより一回りほど大きなものを 4 個持ち出してきた」⁵⁴⁾、C. Doyle は攝政時代のスパークリングを正確に準っているのである。

そして、“Rodney Stone” もこうした世界を活写したボクシング小説であった。

さて、C. Doyle は歴史小説、ホームズ物語を通してボクシングを擁護してきた。富山によれば、C. Doyle にとってボクシングは自己の境遇から脱却するための身振りであったと指摘しているが⁵⁵⁾、さらには世紀末文学としての大衆文学にはスポーツに期待されるものを社会的要請とみなして、スポーツ風俗をとり入れ時代的精神を代弁した傾向がみられる。であれば、C. Doyle もその代表者に加わることができる資格を十分持っていた、と考えられる。

引用・参考文献

- 1) B. サイモン『イギリス教育史 II』P.213. 亜紀書房、1980.
- 2) コナン・ドイル 『わが思い出と冒險』P.293. 新潮文庫、1965.
- 3) コナン・ドイル Ibid. P.255.
- 4) コナン・ドイル 『勇将ジェラールの冒險』P.132. 創元推理文庫、1972.
- 5) コナン・ドイル op. cit., P.144.
- 6) コナン・ドイル op. cit., P.109.
- 7) コナン・ドイル 『回想のシャーロック・ホームズ』P.80. 創元推理文庫、1990.
- 8) コナン・ドイル 『シャーロック・ホームズの叡智』P.161. 新潮文庫、1992.
- 9) コナン・ドイル 『シャーロック・ホームズの帰還』P.213. 新潮文庫、1985.
- 10) コナン・ドイル op. cit., P.180.
- 11) コナン・ドイル op. cit., P.181.
- 12) コナン・ドイル op. cit., P.72 ~ 73.
- 13) コナン・ドイル op. cit., P.205.
- 14) コナン・ドイル op. cit., P.109.
- 15) C. Doyle: "Rodney Stone" P.294. London, 1901.
- 16) コナン・ドイル 『シャーロック・ホームズの事件簿』P.403. 新潮文庫、1991.
- 17) コナン・ドイル op. cit., P.130.
- 18) コナン・ドイル op. cit., P.293.
- 19) コナン・ドイル op. cit., P.293.
- 20) コナン・ドイル op. cit., P.293.
- 21) コナン・ドイル op. cit., P.293.
- 22) コナン・ドイル op. cit., P.294.
- 23) コナン・ドイル op. cit., P.303.
- 24) コナン・ドイル op. cit., P.304.
- 25) コナン・ドイル op. cit., P.304.
- 26) コナン・ドイル op. cit., P.308.
- 27) コナン・ドイル op. cit., P.134.
- 28) コナン・ドイル op. cit., P.319-320.
- 29) コナン・ドイル op. cit., P.318-319.
- 30) コナン・ドイル op. cit., P.83.
- 31) コナン・ドイル op. cit., P.20.
- 32) コナン・ドイル op. cit., P.178.
- 33) コナン・ドイル op. cit., P.241.
- 34) コナン・ドイル op. cit., P.161.
- 35) コナン・ドイル op. cit., P.257.
- 36) コナン・ドイル op. cit., P.265.
- 37) コナン・ドイル op. cit., P.292.
- 38) コナン・ドイル op. cit., P.339.
- 39) コナン・ドイル op. cit., P.47.
- 40) コナン・ドイル op. cit., P.297.
- 41) コナン・ドイル op. cit., P.299.
- 42) コナン・ドイル op. cit., P.138.
- 43) コナン・ドイル op. cit., P.140.
- 44) コナン・ドイル op. cit., P.141.
- 45) コナン・ドイル op. cit., P.142.
- 46) コナン・ドイル op. cit., P.170.
- 47) コナン・ドイル op. cit., P.299.
- 48) コナン・ドイル op. cit., P.298.
- 49) C. Doyle: op. cit., P.251.
- 50) C. Doyle: Ibid. P.251.
- 51) コナン・ドイル op. cit., P.300-301.
- 52) コナン・ドイル op. cit., P.301.
- 53) コナン・ドイル op. cit., P.301.
- 54) コナン・ドイル op. cit., P.137.
- 55) E. B. Michell, "Boxing and Sparring, Fencing, Boxing, Wrestling. (The Badminton Library of Sport and Pastimes.) P.146. London, 1890.
- 56) ホブソン 『帝国主義論』下巻、P.129. 岩波文庫、1976.
- 57) ホブソン Ibid. P.128.
- 58) ホブソン op. cit., P.13.
- 59) ホブソン op. cit., P.33.
- 60) H. D. Miles, "Pugilistica: The History of British Boxing", Edinburgh, 1906.
- 61) ホブソン op. cit., P.135.
- 62) 石川 輝 「ボクシングの歴史」『最新スポーツ大辞典』

- 典』 P.1178. 大修館、1987.
- 63) J. A. Mangan, "Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School", p.9. Cambridge Univ Press. 1981.
- 64) 小石原美保『学校小説の中のアスレティシズム』体育の科学、vol.43. 6. P.442. 1990.
- 65) Lord Byron, "Journal, Vernon Scannel (Chosen by), Sporting Literature: An Anthology, P.155.
- 66) 松井良明『19世紀イギリスのボクシング史におけるスパーリングの果した歴史的意義について』スポーツ史研究、第3号、P.12. 平成元年。
- 67) 村岡健次、鈴木利章、北川稔編『ジェントルマン、その周辺とイギリス近代』 P.232. ミネルヴァ書房、1987.
- 68) マーク・ジルアード『騎士道とジェントルマン』 P.239. 三省堂、1990.
- 69) 村岡健次、鈴木利章、北川稔編、op. cit., P.259.
- 70) 松岡健次、木畑洋一編『イギリス史 3』(現代世界歴史体系)、P.119. 山川出版、1990.
- 71) 松井良明『規範としての文化』(文化総合の近代史) P.173. 平凡社、1990.
- 72) 松井良明 op. cit., P.474.
- 73) 松井良明 op. cit., P.488.
- 74) ピエール・クース・ティアス『19世紀のイギリス小説』 P.112. 南雲堂、1986.
- 75) Peter Bailey Leisure and Class in Victorian England, Rational recreation and the contest for control, 1830-1885" Toronto Univ Press 1978.
- 76) フィリップ・メイソン『英国の紳士』 P.117. 晶文社、1991.
- 77) P. C. マッキントッシュ『近代イギリス体育史』 P.112. ベースボール・マガジン社、1983.
- 78) スティーヴン・ハンフリーーズ『大英帝国の子どもたち』 P.66. 栢植書房、1990.
- 79) スティーヴン・ハンフリーーズ op. cit., P.252.
- 80) 寺島善一「イギリスのスポーツ」『最新スポーツ大辞典』 P.70. 大修館、1987.
- 81) 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世纪末』青土社、1993. 本研究が同書を基調としていることを特記しておく。
- 82) 富山太佳夫 op. cit., P.206.
- 83) 富山太佳夫 op. cit., P.298.
- 84) 富山太佳夫 op. cit., P.203.
- 85) 富山太佳夫 op. cit., P.211.

(1994年12月2日受付)